

# 刊行によせて

## 博物館型研究統合への第一歩

日本常民文化研究所は、2023年3月、博物館相当施設に認定されるとともに、神奈川大学の横浜キャンパス内に常民文化ミュージアムをオープンさせました。統一的な資料台帳や資料カードが未整備であることなどまだまだ博物館としては未熟な段階ですが、2023年度はまずは今ある常民研が博物館としての第一歩を歩み出した年といえます。その意味で、これからの常民研は、研究を第一義とする研究所であるとともに、これまで以上に展示など博物館事業を通して社会貢献を果たす場として、その存在意義が問われることとなります。

これまで常民研は、日本人の生活文化とその歴史について、長年にわたり民俗学、歴史学、文化人類学といった多様な方法により研究をおこなってきました。一方で、1921年の創建当時は、アチックミュージアム・ソサエティの名称が示すように博物館を強く意識した研究所でした。事実、当時は盛んに民具や古文書など史資料の系統的な収集がなされていました。しかし、残念なことに、そのアチックミュージアムが日本常民文化研究所と改称され、また系統的に収集された民具コレクションの多くが財団法人日本民族学協会附属博物館（1938年開館）に移管され、さらに1982年に神奈川大学の付置研究所となることで、博物館としての機能は大きく減退することになりました。

2021年に創立100周年を迎えた常民研は、次なる1世紀を見据え、それまで20世紀COEプログラムや国際常民文化研究機構を通して培ってきた共同研究拠点としての機能をよりいっそう強化するとともに、アチック・ミュージアム時代に立ち返り博物館機能を充実させることを大きな目的として掲げました。そうして誕生したのが常民文化ミュージアムということになります。

この常民文化ミュージアムの開設により、常民研は博物館機能を有する研究機関として、これまでにない新たな博物館型研究統合を目指すこととなります。共同研究などの研究成果を企画展示やワークショップといった博物館事業を通して広く社会に発信するとともに、学芸員養成など大学教育にも活用してゆくこととなります。博物館型研究統合は、大学の付置研究所が博物館機能を有するからこそ可能となる研究と教育の融合であり、社会貢献のあり方であるといえます。

2025年3月

神奈川大学日本常民文化研究所  
所長 安室 知